

[69]文學研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/2339148>

出版情報：文學研究. 69, 1972-03-25. Faculty of Literature, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

<p>「文学研究」筆者別索引〔筆者はABC順による〕 〔括弧内は輯号を示す〕</p>	<p>有田 忠 郎</p> <p>「悪の華」の統一性について（五一） 詩と近代世界（六〇） —フランスの場所を中心とする一つの覚え書— 詩と近代世界（六一） —初期のヴァレリーをめぐるつて— サン・ジョン・ペルス「流瀆」—（六二） —翻訳と註解の試み—</p>	<p>千代 正一郎</p> <p>独逸的なるもの（三三）</p>	<p>福田 良 輔</p> <p>奈良朝時代東国方言の成立について上（三七）・中（三八） 奈良朝時代東国方言成立に関する諸問題（四二） —亀井孝氏・金田一博士の批判に答えつつ— 古事記の純漢文的構文の文章について（四四） 筑前国志賀白水郎歌十首の作者の複数性について —表現形式と伝誦性とを中心に—（四六） 古代語法存疑—エ列音の連体形—（四八） 古代語法存疑—久語法について—（五〇）</p>
<p>奈良時代東国方言の周辺 —言語基層・八丈方言・補説—（五三） 奈良時代東国方言の音韻状態（一）（五六） 古代日本語に現われてゐる動詞型連用形の特異形について （五七） 古代日本語における複語尾の四段活用「る」の一考察 （五九） 中央語系日本語における音節結合 —有坂法則について—（六〇） 表記法から見た万葉集卷十四の成立について（六一） ア列音の活用機能とク語法（六五）</p>	<p>芳 賀 敬 治</p> <p>イアゴの動機をめぐるつて（六〇）</p>	<p>樋口 忠 治</p> <p>トオマス・マンの「すげかえられた首」の問題（六〇）</p>	<p>今 井 源 衛</p> <p>花山院研究 一（五七）・二（五八）・三（六一） 「八重葎」に就いて（五九） 松本文庫本「光源氏一部詩」翻刻上（六二）・中（六四）・ 下（六七） 紫式部の出生年度（六三） 枕草子の古注釈書—素行筆本について—（六五） 戒仙について—業平から貫之へ—（六六）</p>

<p>奥村 三雄 アクセント史料としてみた平曲譜本(六九)</p>	<p>宇治拾遺物語の一本より(九) 金光明最勝王經註釈一本の古点について(二四) 法王帝説統考(二一) 聖語蔵御本央掘魔羅經の字音点(二三) 古訓語彙小攷(三三) 一八五〇年和訳の馬太伝(三六)</p>
<p>春日 和男 指定表現の様式―発生過程よりの考察―(五〇) 「花桜をる少将」における語彙―小弓その他―(五一) 下照姫の歌―歌格と提示法と―(五二) 「也」字の訓読考 ―「なり」の表記としての「也」字―(五四) 聴覚および視覚による表現上(五六)・下(六〇) 指定辞「たり」雑考 ―特にその発生と用法と―(五七)</p>	<p>片山 正雄 文学科概説(一)</p>
<p>草仮名による字音表記(五八) 慶長十五年閏書五逆秋(無門関鈔)の国語学的研究 一 貞享 三年書写 ―序 指定辞の様式―(六一) 前田家本日本靈異記の性格―「師自夏卒之」考―(六五) 説話文体の効用―「今昔考」の終りに―(六六) 慶長十五年閏書 五逆秋(無門関鈔)の国語学的研究二(六八) 貞享 三年書写</p>	<p>国松 孝二 愛と憎しみ―「ニーチェと古典文献学」の一章―(三五) 運命への目覚め(三六) ドイツからの脱出 ―ニーチェの個人主義の基底について―(三八) ゲーテの革命劇をめぐって(三九) ニーチェについて(四〇)</p>
<p>春日 政治 片仮名交り文の起源に就いて(一) 古訓漫談(二) 「小学方言講義」より(四) 高野山にて観たる古点本二(七)</p>	<p>小島 吉雄 明治初期の歌論(一) 宗祇の晩年(三) 新古今和歌集の撰集態度と撰集事業(五) 所謂石津本新古今和歌集に就いて(八) 連歌における美的情調 一(一一)・二(一二) 新古今集歌風と註釈の問題(二八)</p>

<p>春日博士所蔵二十一代集中の新古今和歌集に就いて(二三) 後鳥羽院の御文学(二五) 新古今集写本に於ける撰者名の頭書について(二八) 新古今集伝本考(三〇) わが国近世の運命悲劇(三三三) 見るに随ひて(三四) 池袋清風の訳詩(三五) 「奥の細道」覚書(三七) 芭蕉の「荒海や」の句について一(三八)・二(三九) 歌集「みだれ髪」を論ず(四〇)</p>	<p>小 牧 健 夫 ヘルデルリンのエトナ劇断片(二) クライストの「公子ホンブルク」の問題 一(六)・二(八) 銀の鈴(一一) ゲーテの従軍記(一五) ヘルデルリンの半神観 一(二二)・二(二四)・三(二六) 菜花行(二三) クライスト随想(二八) 独逸浪漫主義の諸問題 一(三〇)・二(三三) 正岡子規とレッシング(三三) 西方寺の庭(三五) われもまたアルカディアに(三六) 砂に書く(四〇)</p>	<p>小 西 昇 後漢に於ける楽府詩流行の状況について(六〇) 漢代楽府詩における詩経の連想的表現方法の衰滅(六一)</p>	<p>前 川 俊 一 ワーヅワースとソールズベリーティンタン旅行(三七) ワーヅワースにおける自然観の進展(三八) ワーヅワース「辺境の徒」について上(四〇)・中(四二) バイロンの「ドン・デュアン」(四一) 「壮大なる耳目の世界」上(四五)・中(四五)・下(六四) ワーヅワースの空間感覚、其他について一 英京雜記(五二) ルーシー詩群について(五四) ワーヅワースとデイヴィド・ハートレの哲学上(五七) コウルリッヂ「老水夫の歌」訳(五九) ワーヅワース「序曲」冒頭五行の創作年代について(六二) 「ひとり表列る乙女」考 一「壮大なる耳目の世界」拾遺一(六五) イエイツ受憐詩抄一試訳一(六六) ヴィクトリア朝詩雜抄(六七) 英詩雜抄(試訳)(六八) 芭蕉とワーヅワース(六九)</p>	<p>小 室 光 弘 土と文芸(三三)</p>	<p>丸 田 裕 子 「嵐ヶ丘」の語り手ネリイ・ディーンに関する一考察(六二)</p>
---	--	--	--	------------------------------	--

<p>松 枝 茂 夫 鏡花縁の話―異国廻りを中心として (二二六) 蝶番居士張岱 (二八) 菜天寥とその一家 (三〇) 醒世姻縁伝の話 (三二) 郝蘭皋の随筆 (三三) 兒女英雄伝の面白さ (三四) 金聖歎の水滸伝 (三五)</p>	<p>Etymologie des Aj Kusiro "Armband" — NK, MK Kusil "Jewel" (六九)</p> <p>目加田 誠 填詞選釈 (一三) 民国以来の中国新文学 (一四) 雅に就いて (二〇) 白楽天の諷諭詩 (二三) 幽詩考附東新考 (二五) 詩経に詠はれた自然界 (二七) 陳碩甫伝 (二九) 春秋の断章賦詩に就いて (三一) 詩教 (三三) 文心雕龍 (三四)(三五)(四〇)(四一)(四七)(六〇)(六一) 洛神賦 (三六) 六朝文芸論に於ける「神」「氣」の問題 (三七) 詩格及び詩境に就いて (三八) 李笠翁の戯曲 (三九) 曹禺の戯曲 (四二) 王維―安史の乱と詩人たち― (四三) 楽府についての一考察―民歌と文人の詩との問題― (四五) 水滸伝解釈の問題 (五〇) 聞一多評伝 (五一) 孽海花 (五四) 礼教喫人 (五六) 二人の宝玉 (五七)</p>
<p>松 田 伊 作 アナト神話―ウガリット語研究覚書Ⅰ (六五) クリト叙事詩(1)―ウガリット語研究覚書Ⅱ (六六) クリト叙事詩(2) (HK, HK) ―ウガリット語研究覚書Ⅲ (六八)</p> <p>松 浪 有 Functional Development of the Present Participle in English. Part I (六三)</p>	
<p>村 山 七 郎 権左 (ボモルツエフ)・ア・ボグダーノフ共著、簡略文法 について (六六) DYBOWSKI のシムシユ島アイヌ語資料について (六七) 新スラヴ・日本語辞典における18世紀初めの薩摩方言語彙 (六八)</p>	

<p>九歌試訳(五八) 紫陽花(六三) 「文学研究」の思い出(六五)</p>	<p>森永 隆 謝恩(三三)</p>	<p>毛利 可信 英国中世詩解釈ノート(五八) 中世英詩「シシリーのロバート」試訳(五九) 内部言語形式ノート―意味の探求―(六〇)</p>	<p>森山 隆 上位オホヲ音節の結合的性格(六〇)</p>	<p>元田 脩一 『アッシアア家の崩壊』とゴシック・ロマンス(六三) 『ねじの回転』の諸解釈上(六四)・下(六五) トルーマン・カポーティ「遠い声、遠い部屋」の限界(六七) ニュー・ゴシックとしての『夜の木その他の短篇』(六八) ナサニエル・ホーソン『ラパチーニの娘』 ―限界への挑戦者と屈従者―(六九)</p>	<p>永田 英一 ヴィニーの哲学詩について(三三)</p>
<p>アンドレ・シェニエ(詩人と市民)(三五) スタール夫人「ルソーについての書簡」(三六)・(四〇) ルソー『マルゼルブ氏への四通の書簡』(三八) ルソー『対話録』余聞(四二) ダランベール「ジュネーヴ論」(四四) ジュネーブ市民(ルソーについて)(四六) ルソー『学問芸術論』の背景</p>	<p>―デイジョン・アカデミー―(四九) アンドレ・シェニエの政治的散文 一(五〇)・二(五五) アンドレ・シェニエ覚書 一(五一)・二(五六) アンドレ・シェニエとイギリス(五二) ルソー『ボームン狹下への書簡』 ―ジュネーヴとの関連において―(五三) ルソーとヴォルテール 一(五七)</p>	<p>ビュマン述『ジャン・ジャック・ルソー讚』(六一) ラツトシュ編『アンドレ・ド・シェニエ全集』 ―一八一九年の「解説」について―(六四) モーリス・パレス述『ルソー生誕二百周年』(六五) アンドレ・シェニエの政治的散文 (六) ―「ジャコバン党」―(六六) ヴォルテールの哲学詩(六八)</p>	<p>中村 幸彦 西鶴における創作意識の推移(五八) 江戸時代上方における童話本(五九) 翻刻玄旨公御連哥(六〇)</p>		

<p>林羅山の翻訳文学―「化女集」、「狐媚鈔」を主として― (六一) 柳里恭の誠の説 (六三) 印刷の時点―仮名草子小考― (六五) 五井蘭洲の文学観 (六六)</p>	<p>頭韻式「モルト・アルテュール」について (四七) 憶出と偶感 (五七)</p>
<p>中山 竹二郎 「貧者の友」ウィリアム・ラングランド (一) イギリスの中世の宗教劇 (五) イギリスの古劇の詩形について (九) チョウサアと現代英語 (二三) 散文韻律について (一九) チョウサアに於ける措辞的特徴について (二二) ウェリイの英訳『源氏物語』 (二三) チョウサアその生涯と性格 (二七) キャンタベリー巡礼の世界 (三〇) チョウサア二面性 (三三) 『サ・ガウエインと緑の騎士』について (三四) メリディスの詩について (三五) チョウサアの『トロイルスとクリセイデ』 (三六) ソオロウとその生活観 (三七) 英文学と貧困 (三八) イギリス宗教劇の世俗化 (三九) ウェイクフィールド劇「第二羊飼の段」(試訳) (四〇) 『ヨーク劇』「イサク人身御供の段」(四二) ル・モルト・アルテュール (四四)</p>	<p>成瀬 正一 十八世紀に於ける文芸サロン (二) (三) 新旧両派の文芸論争 (七) モンテーニュと東洋の悟道 (二六) 旅行報告書 (二六)</p>
<p>西田 越郎 シュティフターについて (四三) ワルテル・フォン・デル・フォーゲルワイデについて (四五) ワルテル・フォーゲルワイデの <i>Elegie</i> 及 <i>Kreuzlied</i> (四六) ゲオルク・ビュヒナー 一 (四八)・二 (四九) ワルターの宗教性について (五〇) ハインリッヒ・フォン・モールゲンミミンネの一形態― (五一) ヴアルター・フォン・デル・フォーゲルヴァイデ 一 (五三)・二 (五五) 「バルチファル」における <i>leit</i> の問題 (五七) <i>libertending</i> について―一つの報告― (六五)</p>	<p>野上 豊一郎 杉田玄白とその周囲の人たち (一九) 使徒瞥見 (三五)</p>

<p>大江 三郎</p> <p>日本語中の外来語における母音呼応 (六六)</p> <p>Perfect and Progressive in English Transformational Grammar (六七)</p> <p>On the Importance of Linear Order in English Relativization (六八)</p>	<p>岡村 繁</p> <p>唐末における曲子詞文学の成立(六五)</p> <p>陶淵明論(六八)</p> <p>『歴代名画記』校注 一(六九)</p>	<p>小野島 行忍</p> <p>サッカ・パンハ・スツタンタ(二三)</p> <p>リツ・サンハラ(二〇)(二二)(二三)</p> <p>訳梵漫語(二三)</p> <p>梵詩メーガ・ゾータ散文訳(二八)(二九)(三二)</p> <p>草枕そぞろごと(三三)</p> <p>梵語奈留別誌(三四)(三六)</p>	<p>ペロル(ジャン)</p> <p>Littérature, Langue française et monde moderne (六一)</p>	<p>笹月 清美</p> <p>天平八年の遣新羅使一行の歌(二三)</p>
<p>古事記の文芸的性質に関する認識の発展(一七)</p> <p>文芸活動の機構(二一)</p> <p>本居宣長における道と文芸(二三)</p> <p>語意考の成立過程を示す二・三の伝本について(二六)</p> <p>本居宣長の国語研究(二九)</p> <p>小林歌城のテニオハ説(三一)</p> <p>富士谷御杖の言語論について(三三)</p> <p>夕顔(四〇)</p>	<p>佐藤 通次</p> <p>世界の極性とゲーテの「ファウスト」(一)</p> <p>雅歌(四)</p> <p>生の悲劇性(八)(九)</p> <p>「思う」と「考える」(一〇)</p> <p>数・性・格と体験(二四)(二六)(二七)</p> <p>「老」と「親」とについて(二二)</p> <p>創世神話とわが民族の原体験(二三)</p> <p>「生む」の論理的構造(二五)</p> <p>「超人」の事行論的解放(二七)</p> <p>表現の二契機―「見る」と「生む」と(二九)</p> <p>文芸学の志気―「ファウスト」研究に寄せて―(三一)</p> <p>歴史と形態変化―ゲーテの研究の一齣(三三)</p> <p>創刊の頃(四〇)</p>	<p>重松 泰雄</p> <p>啄木の社会思想について(四三)</p>		

<p>進藤 誠 一</p> <p>「フィガロの結婚」とボーマルシェー (一) ユーリエヌ・ラブツシュの喜劇 (六) スクリープの功罪 (八) (九) (一一) コメディ・フランセーズの沿革 (一二) (一四) (一五) 十九世紀中葉以後に於ける仏蘭西風俗劇 (二八) (二五) 日本に於けるコメディ・フランセーズ (三三) モリエールの結婚 (二七) マリヴォア覚書 (二九) フランスに於けるイタリア人劇団の業績 (三二) (三四) 「ブリタニクス」から「五大力」へ (三三) 作者兼俳優 (三五) フランス最古の喜劇 (三六) モリエールの芸風について (ノート) (三九) マダム・ド・ロングヴェイルの生涯 (四〇) (四五) ルニヤールの喜劇 (四三) ランブイエ侯夫人のサロン (四七) (五〇) 中山さんと私 (五七) 感想 (六一)</p>	<p>「花屋日記」の著者俳人文暁の研究 (四三) 鷗外博士の俳句観、及び其の俳句について (四四) 九州蕉門の研究 一―枯野塚と『枯野塚集』― (四五) 九州蕉門の研究 二―「漆川集」と筑前嘉穂俳壇について― (四六) 死に近き芭蕉―芭蕉の曲翠苑新資料書簡を中心に― (四八) 九州芭蕉門俳諧史概説 (四九) 芭蕉連句研究―「升買て」の巻 (五〇) 芭蕉連句研究―「けふばかり」の巻・「芹焼や」の巻 (五一) 芭蕉連句研究―「松風に」の巻 (五三) 芭蕉連句研究―「此の里は」の巻 (五五) 素堂の真蹟二種について (五六)</p>
<p>白石 悌 三</p> <p>一宗匠誕生の周辺―水間沾徳覚書 一 (六二)</p> <p>杉浦 正一郎</p> <p>「奥の細道」の制作心理 (四一)</p>	<p>朱雀 成子</p> <p>『オセロー』―デスデモーナのいわゆる「完全な愛」についての一考察― (六九)</p> <p>高木 市之助</p> <p>吉野の鮎 (二七) 国見放 (三〇) 牡丹芳 (三三) 玉島川仙媛放 (三五) 酒仙供養 (三六) 思出十年―私本位に書きつづるところの― (四〇)</p> <p>高田 淑</p> <p>Hans Carossa und der Zweite Weltkrieg (六九)</p>

高橋義孝

芸術学、芸術史における没価値性の意味

—ウエーバーの一論文を中心に— (四〇)

トーマス・マンのフロイト論 (四一・四二)

創造的余剰 (四四)

「統一ヨーロッパ」意識の現代ドイツ文芸理論における諸

反映 一 (四五)

文学と社会との連続・非連続の問題 (四六)

芸術は「進歩」するか (四九)

能の美学・序説 (五〇)

ルカーチュの論文「上部構造としての文学」に対する批判

(五一)

文学研究に対する「精神分析」の諸寄与 一 (五五)・二

(五六)

芸術的感動について—文学研究に対する

「精神分析」の諸寄与(その三) (五七)

メフィストフェレス考 (五八)

世阿弥「花」と「物まね」 (六一)

芭蕉小論—ある論稿断片 (六二)

美とイデオロギーと文学 (その一) (六四)

Thomas Mann in Japan zu seinem 12. Todestage

(六五)

マルクス主義の光の下に見られたゲーテの『ファウスト』

—ルカーチュの『ファウスト論稿』— (六六)

田中 晃

表現の構造 (一六)

万葉歌人の国家思想 (一八)

行為と哲学 (二〇)

日本の現実主義と「もののあわれ」 (二三)

生成の根拠としての自然 (二五)

田中 栄一

Musset の作品にあらわれたイタリヤ (六五)

Barbey d'Aurevilly の《Les Diaboliques》 (六八)

豊田 実

日本に於けるシェイクスピア紹介の歴史 (一)

英吉利漂流邦訳考 (四)

芥川龍之介とエドガ・アラン・ポオ (七)

基督教聖書和訳の歴史 (一二)

故坪内博士の『英文小学読本』 (二二)

日本とシェイクスピア (一六)

日本に於ける英文法紹介及び研究の歴史 (二〇)

俳句と英詩 (二三)

生活、文化の反映としての英語史緒言の一節 (二六)

言語起源の問題—英語史「第一部概観」の緒論— (二九)

言語を通して見る英人祖先の生活—大陸時代— (三一)

日英語音の異同と国民性 (三三)

人及び作家としてのシェイクスピア (三五)

シェイクスピアの女性観 (三六)

鶴久

上代特殊仮名遣の消滅過程について
—「野」字の変遷をめぐって— (五五)

ウェリングズ (N・G)

The New Poetry (六一)

矢島徹輔

庾信の絶句体詩における文学意識の転換 (六五)

山内普卿

六朝時代の展望 (二)
牟子問題の清算 (四・五・六)
王鳴盛氏の仏典観 (一一)

矢田部達郎

古語に於ける「てには」の意義 (三三)

吉町義雄

「物類称呼」西国方言索引 (一)
九州方言の特異性 (三)(二)・四(三)・五(五)
島津斎彬の「ローマ字日記」と長田穂積の「菊池俗言考」(七)
博多仁和加用語に現れた活用一段化趨勢 (一〇)
日本語動詞現在時形態論 (一五) (一七) (一九) (二二) (二四) (二六)

九州方言四段変格活用動詞分布相 (二二)

紫雲山人鹿兒島方言文学書四抄 (二八)

施福多「日本文庫及び日本文書研究提要」前(三〇)後(三二)

壘都創刊日本語辞書 (三三)

大和口上言葉集 (三四)

上海刊行日本語文典 (三五)

九州方言推量・打消動詞活用分布相 (三六)

—日本風俗備考—蘭日会話 (三七)

九州方言指定・比況助動詞活用分布相 (三八)

対馬字引「日暮芥草」府中語抄 (四〇)

九州方言敬讓・希求助動詞活用分布相 (四一)

「園翁交語」と「八丈実記」の鳥言葉 (四二)

イブン・マールクの千一行詩単語文法 (四三) (四七) (五〇)

(五四) (五九) (六一) (六三)

九州方言感動詞詁形分布相 (四四)

九州方言代名詞詁形分布相 (四八)

滑稽洒落一寸見た夢物語 (五二)

「欧弗旅行記」瑞日語彙 (五七)

露都創刊露日小辞書 (六〇)

明治十年長崎出版拉語講義 (六一)

博多漫語 (六三)